Vol. 34 No.3
2016. 11. 1

R E I M E I
黎明

鹿児島県歴史資料センター
黎明館だより

Kagoshima Prefectural Museum of Culture Reimeikan

黎明館企画展

新寄贈資料おひろめ展　明治から昭和

― 見えてきた暮らしと世相 ―

平成28年９月21日（水）～平成29年１月22日（日）
３階　企画展示室

鹿児島市全景（行幸記念寫眞帖）【昭和６（1931）年】

平成24年度以降に寄贈された民俗資料の中から，テーマに沿って資料を選び，展示しています。これらの資料は，庶民の暮らしの中で，親から子に，子から孫に大切に受け継がれてきたものです。

明治維新からの約150年の間に，人々は時代の変化に翻弄されたり，流行に乗り，又は流されたりしながらも，たくましく生きてきました。その暮らしの中で使われた明治時代から昭和時代にかけての資料を調べると，それぞれの時代の暮らしと，世の中の様子が少しずつ見えてきます。

今回の展示では，このような資料調査から分かってきた，郷土鹿児島の人々の暮らしと世相を振り返ります。

はじめに

明治20年代の鹿児島県の風俗を今に伝える『薩摩見聞記』を紹介します。

これは，旧長岡藩士の本富安四郎（1865 ～ 1912）が，明治20年代に教員として赴任した薩摩で見聞きしたことを，土地，気候，歴史，人物，年中諸事，遊戯，葬婚，浴場，貧富，言語，歌舞音曲，訪問，宴会，飲食物などの22項目に分けて記述したものです。長岡藩(現：新潟県長岡市)と薩摩藩は，戊辰戦争で敵味方に分かれて戦いましたが，本富は，旧敵薩摩を努めて客観的な視点から記録しているようです。

この，120年余り昔の人々の暮らしぶりを知ることができる貴重な資料を，挿絵と分かりやすく現代語に訳した文章で紹介します。

薩摩見聞記【明治35（1902）年】

第１章　郷土玩具と伊勢型紙

鹿児島県と昔から関係の深い沖縄県の琉球張子と，明治10（1877）年頃から昭和初期まで川内町(現：薩摩川内市)で営業していた染め物業者が，実際に絵柄を染め込むために使用した伊勢型紙を紹介します。

この型紙を彫る職人の手業は，現在，国の重要無形文化財にも指定されており，展示場では，小さな円の連続によって柄を構成する錐彫り，定規を当て手前に小刀を引き，細かい縞模様を生み出す縞彫り，刃先が楕円や菱形をした彫刻刀で型抜きするようにして彫る道具彫り，刃先が僅か1ミリにも満たない鋭利な小刀を紙に突き刺し上下に細かく動かし彫り進める突彫り，これらの四つの彫り方の違いを見比べることができます。

琉球張子（虎）

伊勢型紙（錐彫り：一部拡大）

第２章　世相を伝える資料

当時の世相を伝える資料として，春遊びすご六・市松人形・郷土部隊慰問演芸団・マッチラベルコレクションを紹介します。

『春遊びすご六』は，20世紀を迎えた明治34（1901）年１月１日の鹿児島実業新聞広告附録として，世に出たもので，鹿児島県内の名所旧跡が描かれています。

そこには，現在も賑わっている所，当時の賑わいを感じることができなくなった所，もう見ることができない所など，14箇所が描かれています。また，裏面には，広告主の山下呉服店が販売していた衣料品の値段が記載されています。当時の観光地の様子と物価を知ることができる資料です。

春遊びすご六・櫻島【明治34（1901）年】

市松人形は，桐塑（とうそ）などで作られた頭・手・足を，おがくずを詰めた布で作った胴体でつないだ着せ替え人形です。江戸時代から昭和時代にかけて，女性や子どもたちがあやしたり，お着替えをしたりして遊びました。

この人形が注目を集めたのが，昭和２（1927）年の日米親善人形交流の際に，米国から贈られた「青い目の人形」へのお返しに，日本からも市松人形が「答礼人形」として贈られたというニュースでした。

しかし，多くは暮らしの中で，親から子に贈られたもので，家族の思い出とともに大切にされてきました。

今回は，大正時代末から昭和時代初めにかけて作られた人形を展示しています。

市松人形
【大正末期～昭和初期】

昭和12（1937）年に勃発した日中戦争以降，吉本興業と朝日新聞社が戦地に派遣し，全国的に大きく報道された演芸派遣団「わらわし隊」などの他にも，多くの演芸団が戦地に向かいました。

本県からも，昭和14（1939）年，郷土部隊慰問演芸団が旅立ち，70余日もの間，戦地に笑いと感動を届けており，その様子は，『中支派遣郷土部隊慰問記念帖』から知ることができます。

そこには，最前線の郷土出身の兵士たちに演芸を披露する様子や，移動の様子などが掲載されており，あの時代の出来事や世相を，現代に伝えています。

舞台スナップ（漢口）
【中支派遣郷土部隊慰問記念帖　昭和14（1939）年】

昭和20（1945）年に太平洋戦争が終わり，復興のために人々のエネルギーが注がれるようになると，県内各地の繁華街にも活気が戻ってきました。まだ，100円ライターなどが存在しないこの時期に，マッチは日用品として身近で，宣伝効果の高いものでした。これらのマッチラベルには昭和20年代の賑わいを牽引した百貨店などの広告が掲載されています。

マッチラベル【昭和20年代】

第３章　暮らしを伝える資料

集落で生活する人々は，暮らしを守るために水天（神）講，田の神講などの祭祀を共同で行ってきました。その記録が講帳（こうちょう）です。

昭和八年一月十六日改水天講帳
【昭和８（1933）年から，昭和23（1948）年】

この，「昭和八年一月十六日改水天講帳」には，昭和８（1933）年から，昭和23（1948）年までの役割分担が記されており，毎年，坐元（ざもと）を１名・寄講（よりこう）２名を決めて実施しています。これによると，前年度の寄講２名の中から次年度の坐元が決められている年が15年間で12回もあり，おおよその規則性があることが分かります。

このような，集落の行事運営のシステムを伝える「講帳」などの資料を紹介します。

第４章　写真が伝える昭和の様子

昭和２（1927），６（1931），10（1935）年に行われた行幸を記念して鹿児島県が刊行した行幸記念寫眞帖に写し出された人々の様子や，戦災に見舞われる前の街並みの写真，また，個人が撮影した昭和29（1954）年の奄美大島の風景や暮らしを撮影した写真を紹介します。

陸軍大演習大本営（県立第一高等女学校，現：県立鹿児島中央高等学校）【昭和10（1935）年】

奄美大島の街並み【昭和29（1954）年】

第５章　東京オリンピック以降の少し昔の資料

戦後復興の象徴と言われた昭和39（1964）年の東京オリンピックを開催する頃には，既に産業構造の大きな転換と生活様式の均質化が進み，生活水準の向上と合わせて，消費者の購買意欲に支えられた新規購入や買い換えが進んでいたことが分かります。

この時期の娯楽家電代表のテレビはカラーへと進化し，パーツも真空管からトランジスタへの変更，集積回路の使用により製品の小型化・高性能化が進みました。

この他にも，高度経済成長期以降の昭和時代に製造された，白黒テレビ，カラーテレビ，カメラ，昭和の刑事ドラマなどでも見られるものと同じ型の黒電話から，昭和50年代の科学少年の心をわしづかみにした実験キットまで，少し昔の資料を紹介します。

白黒テレビ【昭和30年代】

カメラ【昭和38（1963）年発売】

実験キット【昭和53（1978）年頃】

【関連行事】

○　**展示解説講座**（学芸講座を兼ねる。）
「**明治から昭和初期の郷土の姿**
－行幸記念写真帖を中心に－」

日　時：11月20日（日）13：30 ～ 15：00
場　所：黎明館３階　講座室（80席）
講　師：黎明館学芸専門員　**吉井 秀一郎**

※　講座は無料，申込みは必要ありません。
※　講座終了後に企画展示室で解説を行います。その際は，常設展示団体入館料が必要です。
◎　期間中，企画展示室で展示解説を実施します。
日時：10／1(土)，11／6(日)，12／18(日)
1／15(日)　13時30分～ 14時15分

館長メッセージ

皆様，こんにちは。黎明館館長の灰床です。今回は，最近の当館の主な取組などを御紹介します。

①　コンサートの開催

７月19日(火)に，当館としては，昨年に引き続き，２回目の「霧島国際音楽祭“黎明館ナイトミュージアム・コンサート”」を開催しました。

コンサートを開催できましたことを大変嬉しく思いますとともに，主催者の一つであるＪＥＳＣ(ジェスク音楽文化振興会）など関係の皆様の御配慮・御尽力に感謝申し上げます。コンサートは，当館２階の常設展示場内に折りたたみイスを並べるなどした手作り感溢れるアットホームな雰囲気の中で行われ，昨年より20人増の100人定員が満席となりました。当館にて開催できました一つの大きな理由は，当館が鹿児島の歴史・文化を保存し，継承していく施設であることと，霧島国際音楽祭で演奏されるクラシック音楽の，共通する「古典」という意味での「御縁」ではなかろうかと思います。

中でも，会場となりましたフロアは，幕末・維新期に大きな役割を果たしました島津久光を祖とする玉里島津家資料や，西郷隆盛が城山にて最期を迎える前夜に，その音を聴いたかもしれないとされる薩摩琵琶の名器「木枯」などを展示しています。薩摩のクラシックの中で，郷土の先人・偉人達にも想いを馳せ，また敬意を込めて選曲された，電子ピアノの三舩優子氏とチェロの原田哲男氏の「白鳥」（サン＝サーンス）や「森の静けさ」（ドヴォルザーク）などの素敵な調べを楽しんでいただけたものと思います。なお，チェロの原田氏は，鹿児島市の御出身ということもあり，より一層，フレンドリーな雰囲気でした。

歴史，考古，民俗，美術・工芸に関する人文系の総合博物館である当館の新しい魅力が，昨年の蕾から花開き，輝いた夜だったのではないでしょうか。コンサートを御縁に，一人でも多くの皆様に「黎明館ファン」になっていただくことを願う素敵な一夜でした。

②　愛媛にて

９月９日(金)に愛媛県の宇和島市立伊達博物館にて開催されました，秋期特別展「海，遙か　―薩摩藩島津家と宇和島藩伊達家―」の開展式に招待いただき，参加してまいりました。

伊達博物館へは，毎日１往復の鹿児島から松山への飛行機でまいりましたが，開展式の前後の時間を活用し，いくつかの博物館･史跡なども訪問しました。

まず，８日(木)は，松山市内の「坂の上の雲ミュージアム」を訪れました。このミュージアムは，司馬遼太郎の小説『坂の上の雲』をベースに構想・建設されたものです。私自身は，『坂の上の雲』は，鹿児島県入庁後すぐの頃に読みましたが，同ミュージアムに一歩足を踏み入れた途端に，正岡子規，秋山好古･真之兄弟などの世界に舞い戻りました。

「明治」という時代の評価は，なかなか難しい面もあるかと思いますが，様々な切り口による司馬ワールドの展示や，思索を深めることを促す仕掛けとしては，建物そのものを含め，一つの在り方ではと感じたところでした。

なお，『「明治」という国家』を世に問われてしばらく後，鹿児島市民文化ホールでの司馬氏の御講演を拝聴したことがありますが，本当に「オーラ」というようなものを感じたことを鮮やかに思い出しました。

その後，宇和島には，夕方着きました。宿泊したホテルは，ＪＲ宇和島駅併設であり，大変便利でした。そこに，伊達博物館の牧野係長さんに歓迎会への迎えに来ていただきました。ここで，司馬氏風に少し「余談」です。私は，「御縁」を大切にするということを常に心がけていますが，牧野係長さんのお顔と，愛車(通勤用兼柑橘系農産物運搬用の軽貨物)を見た瞬間，非常に親しくなれそうな予感がし，それは，その後すぐに確信になりました。かつては，どの職場にも一人はいらっしゃいました，細やかな気配り・目配りを常にされているタイプの方でした。心から御礼申し上げます。

宇和島藩伊達家の別邸でありました「天赦園」にて開催いただきました歓迎会は，同家の御当主(13代)も参加され，楽しい語らいの時間を過ごすことができました。

牧野係長さんには，歓迎会終了後にホテルまでお送りいただく途中で，わざわざ闘牛場前も通っていただきましたが，実は，その闘牛の中には，徳之島の牛もいるというような話も伺いました。鹿児島とは，いろいろな形で「御縁」がありますね。

９日(金)は，特別展開展式が，午後から開催されたため，午前中は，移築された宇和島藩伊達家家老の桑折(こおり)氏武家長屋門を通り，宇和島城に登りました。天守からは，かつて海城と言われた往事が偲ばれる，素晴らしい景色でした。ただし，鹿児島（鶴丸）城もそうですが，築城当時の海岸線との距離感をしっかりと理解することが大切であると思うことでした。

それにしても，幕末期，英国公使パークスが，そう大きくはない，この地に，宇和島藩家老の松根図書などと五代友厚との信頼関係もあったとは言え，薩摩藩訪問後訪れたとは。優れた藩主の存在意義・価値の大きさを再認識しました。

なお，司馬氏の小説『伊達の黒船』の主人公である嘉蔵(かぞう)についても，天守近くの資料館に，関係資料が展示されていました。

その後，午後から伊達博物館にて開催されました開展式に参加し，来賓の一人として挨拶を行うとともに，テープカットにも参加しました。

この特別展は，パークスの宇和島訪問150周年を踏まえながら，当時の宇和島藩と薩摩藩の交流の様子などを振り返り，両藩について深く認識し，地元の誇りへと繋げていきたいとの願いを込めて開催されたものです。

パークスについては，薩摩藩訪問150周年でもあり，当館にて５月24日（火）から９月11日（日）まで開催しました薩長同盟締結150年企画展「幕末薩摩外交　―情報収集の担い手たち―」でも，主な項目の一つとして，仙巌園にてのパークス一行接待献立書(玉里島津家資料)などを展示したところです。

そのような中で,今回の特別展に当たりましては,当館から，島津久光宛伊達宗城書状，伊達宗城宛島津久光書状草案など，30点近くの資料を提供させていただきました。島津家と伊達家は，幕末期に非常に深い交流があり，当館は，両家の交流が窺える資料を多数所蔵しております。今回のような機会に，当館の資料が展示され，県外の多くの皆様にも御覧いただくことを嬉しく思っています。

今回の特別展は，２年後に明治維新150周年を迎える中で，まさに時宜にかなったものであり，両館の発展に大きく寄与するものです。今後とも，連携を密に，過去を振り返り，歴史に学びながら，将来に向け，積極的かつ発展的な情報発信に努めたいと考えています。

なお，この開展式と，引き続き行われた内覧会の模様は，翌10日（土）の愛媛新聞に掲載され，大変ありがたいことに，当方の挨拶の要約と，担当の上田学芸員さんの熱い想いを込めた解説風景の写真も掲載されており，よい情報発信になりました。

また，幕末，西郷隆盛は，伊達宗城に四侯会議への参加を要請するため，当地も訪れています。その会見の場は，伊達博物館の前であり，解説板も掲示されていました。精力的に国内各地を訪れていた西郷でしたが，平成30年放送予定のＮＨＫ大河ドラマ「西郷(せご)どん」のロケ候補地も，県内だけでなく県外にも沢山あるということを実感しました。

開展式・内覧会終了後は，「天赦園」の庭園を訪れました。規模は小さいものの，枯滝石組みなどを配した風流な造りであり，伊達宇和島藩の気概に触れた思いでした。

その後，松山に夕方着きました。暗くなるまでのしばらくの間，ホテル近くの松山城城山公園堀之内を散策しました。散歩する人，合唱している女子高生グループ，サッカーを楽しんでいる人達など，それぞれに街中の大きな空間を楽しんでいましたが，防災の観点なども含め，その存在は，うらやましい限りでした。

また，ライトアップされた松山城の連立天守は，山上に白く浮かび上がり，シンボリックな姿を，見る者全てに感動とともに与えていました。

10日(土)は，全国紙の記者で，鹿児島勤務時代にお世話になり，現在，松山にて勤務されている方に，道後温泉，石手寺(いしてじ)，松山城本丸を御案内いただきました。

道後温泉は，松山の代表的なブランドで，鹿児島の桜島のような存在であり，外国の方を含め，多くのお客様で賑わっていました。また，石手寺は，国宝の楼門を含め,落ち着いた雰囲気でした。さらに，松山城本丸へは，ロープウェイやリフトもあり，多くの皆様のために登りやすくしてありました。私どもは，勿論，徒歩にて登りましたが，全体としては，上山城を含めた，鹿児島(鶴丸)城全体と同じような造りではと思うことでした。

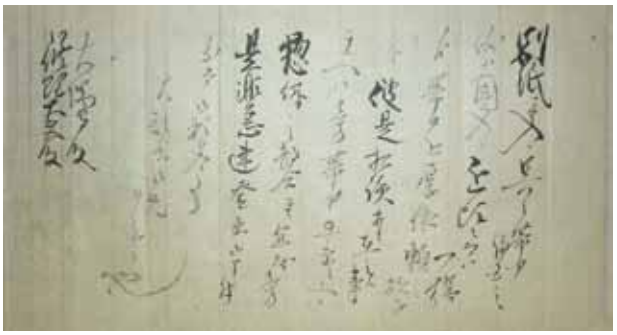
愛媛の２泊３日の旅は，新しい「御縁」をいただくとともに，旧友との再会を喜びながら，当館の今後の運営などにも示唆に富むものとなりました。

感謝！！

常設展示のみどころ55

古文書が語る鹿児島の歴史から

近衛忠房書状



島津久光，茂久（忠義）宛　近衛忠房書状
（元治元（1864）年付）

近衛忠房（天保９（1838）年～明治６（1873）年）は，幕末期の公卿で，関白近衛忠熙の四男である。藤原氏嫡流である近衛家と島津家とは，姻戚関係を通じて特別なつながりがあった。幕末期に関して見てみると，忠房の母は薩摩藩10代藩主島津斉興の養女，郁姫であり，夫人は久光の養女，貞姫である。黎明館が所蔵する玉里島津家資料の中には，忠房が久光，忠義親子に宛てた書状が複数，残っており，これらの書状などからは，幕末の政局において，忠房が薩摩藩との関係をいかに重視していたかが分かる。

本書状は，元治元（1864）年に一旦，京都を離れて薩摩に帰藩していた家老の小松帯刀を早く上京させるよう，依頼している内容のものである。この年の７月19日から20日にかけて，京都では，前年の政変で政局から追い落とされた長州藩が，勢力挽回を図り，御所門外で幕府，会津藩，薩摩藩と交戦して敗れるという事件（禁門の変）が起きた。帯刀は，同年８月13日に京都を離れて，ほぼ一年ぶりに鹿児島に戻ったが，書状には，「近頃では，一橋（（徳川）慶喜）も帯刀を深く頼っている様子で，あれこれと相談などもある事ですので，とにかく帯刀在京であれば，何かにつけて全ての事，都合もよく，その他あれこれの事にて是非急速に登京命ぜられるよう，どうか御頼み申し入れます。」と書かれており，帯刀が忠房のみならず，慶喜からも信頼を得るようになっていることが窺える。

禁門の変の際，慶喜はたびたび帯刀を朝廷への参内に同行させていたようであり，帯刀は慶喜の下で薩摩藩の総指揮を執ったことから，事件を鎮圧していく中で，両者の信頼関係は強固になっていったものと考えられる。

また，近衛家と帯刀の関係であるが，帯刀は，久光の養女であった貞姫と忠房の縁談成立に尽力し，元治元年１月には，近衛家家紋の「菩牡丹」の使用が許されるなど，近衛家の帯刀に対する信頼は非常に厚いものがあった。

元治元年８月12日付で忠房が久光，忠義親子に出したとされる書状には，「今，帯刀が京都にいなくては大いに支障あり，誠に当惑するばかりですので，よくよくこの事お含み下さって，急速京への引戻し方致して下さるよう，（中略）是非ともお頼みの事申し入れたいと存じます。」とあり，忠房が帯刀を緊急に必要としている様子が伝わってくる。

さらに，追伸でも「くれぐれも帯刀こと，五，六日で早々に出立し帰国するよう，深く深くお頼み申し入れます。」と，繰り返し訴えており，不安定な政局の中で，一日でも早い帯刀の上京を求める忠房の悲痛な心境を読み取ることができる。

帯刀は，薩摩藩が近衛家から借り受けた別邸（近衛家別邸御花畑）を提供され，そこを拠点として政治活動を行っていくことになるが，その背景には，前述したような近衛家の帯刀に対する厚い信頼があったことは十分に推察できる。

そして，近年，その近衛家別邸御花畑において，慶応２（1866）年１月，薩長同盟の締結が行われたとされる見方が有力視されている。

【主要参考文献】
『鹿児島県史料　玉里島津家史料四』（鹿児島県（黎明館），1995年）
高村直助『小松帯刀』（吉川弘文館，2012年）

（学芸専門員　市村　哲二）

黎明館講演会
期日：平成28年5月29日（日）
著者・多胡吉郎が語る
「『長沢　鼎　ブドウ王になったラスト・サムライ
― 薩摩から世界へ，世界から薩摩へ ―』」
作家，演出家，元ＮＨＫディレクター　**多胡　吉郎**　氏

《イギリスでの生活》

13歳という若さで薩摩藩英国留学生の一員に選ばれ，慶応元(1865)年３月22日に羽島浦を出航した長沢鼎。約２か月の航海の後に，イギリスのサウサンプトンに到着後，長沢だけが，スコットランド・アバディーンにあるグラバーの実家に下宿し，１人地元の中学校で学ぶこととなった。長沢は，スコットランド英語に慣れるまで半年ぐらいかかったが，色々な科目において大変優秀な成績を修めており，地元の新聞に掲載されるほどであった。

《ハリスとの出会い》

薩摩藩の財政難から，留学生への送金が途絶えてしまうと，留学生は，帰国せざるを得なくなった。森有礼ら一部の留学生は，イギリスに留まって勉学を続けることを強く希望した。その時，彼らに救いの手をさし伸べたのが，トマス・レイク・ハリスという宗教家であった。ハリスは，新生兄弟社（the Brotherhood of the New Life）という新興宗教を開いた人物で，アメリカで信徒たちとともに集団生活を営んでいた。イギリスに短期滞在していたハリスは，留学生の窮状を聞きつけ，自らの教団に勧誘し，学問や生活の世話をすると申し出た。森らは，ハリスの誘いを受け，アメリカに渡る。長沢も森に声をかけられ，共にアメリカに渡った。

《ブロンクトンでの生活》

長沢たちが着いたのは，エリー湖の湖畔にあるブロクトンという町だった。ここのコロニーに，森や長沢らが入植した。彼らは，牛の乳搾り，掃除や洗濯など厳しい肉体労働に従事することになる。長沢は，日課に加え，葡萄栽培の仕事も命じられて関わることとなる。これが長沢と葡萄との最初の接点であった。ハリスは，ワイン醸造を教団の一番の産業の柱にしたいという考えを持っていた。

そのような中，ハリスの教義に疑問を感じ，教団を脱退する者や，日本に帰国する者が相次いだが，長沢のみが教団に残った。

《カリフォルニアでの生活》

教団が，葡萄栽培に適したカリフォルニアに移転すると，長沢も同行し，サンタローザという町にファウンテングローブという農場を開いた。長沢は，大変に勉強熱心で，ルーサー・バーバンクという植物の品種改良のエキスパートと交流し、手塩にかけて葡萄の木を育てた。当時カリフォルニア随一と呼ばれた近代的な醸造所でつくられたワインの品質は，高く評価され，十大ワイナリーの一つに数えられることとなった。ハリスの死後，ワイナリーは，長沢に引き継がれる。ワインは，カリフォルニアからニューヨークにも運ばれ，ロンドンなどにも支店が置かれるなど，世界中に通用するものとなった。また，長沢のワインは，カリフォルニアからヨーロッパに輸出したワインの第一号だと言われている。長沢が，葡萄王と言われるのは単に大規模にビジネスを展開しただけではなく，広くアメリカ国民のために，本場の一級品に劣らないものを，リーズナブルな価格で国民に提供したためである。

その後，長沢は，禁酒法にも負けず，葡萄栽培を続け，1933年，禁酒法が解かれて３か月後にこの世を去った。

長沢鼎を通して明治維新が何だったかということを考えたとき，一見，明治維新とは全く関係がなかった人物のように見える。しかし，一人の薩摩人が，欧米に触れることにより，その意識を変革し，彼の胸にあった想いは，カリフォルニアの地で最終的に実を結び，ワインとして熟したのである。そのような意味で，長沢鼎の人生というのはまさに「完熟の人生」であった。

（文責　学芸課）

研究ノート

広田遺跡出土の貝符について

広田遺跡上層出土貝符

広田遺跡下層出土貝符

広田遺跡は，南種子町平山の太平洋に面する海浜の砂丘上に位置し，昭和32（1957）年から昭和35（1960）年の三次にわたる発掘調査で，上層の焼骨層を伴う集骨再葬墓，中･下層の一次葬墓などから，150体以上の人骨とこれに伴う4万点を超える貝製品が出土した。（近年，南種子町による調査で新たな墓域も確認されている。）

奄美・沖縄以南に生息する大型の巻貝であるイモガイの螺殻（らかく）を板状に加工し，文様を施した貝符は，広田遺跡で初めて発見されたものである。

貝符には，四隅が張る長方形を基本とし，半肉彫りの帯状文を施され，着装のための孔をもつ下層貝符と，長方形や不定形の薄い板状の素材に，「双眼のモチーフ」に代表される簡略化した彫画文様が施される無孔の上層貝符があり，装身具であった下層貝符から，集骨再葬に伴い，死者を守り再生を願う「明器」的な性格をもつ副葬品（上層貝符）へ，葬送習俗の変遷とともにその性格を変えたと考えられた。

発見当初，青銅器や玉器の饕餮（とうてつ）文や爬龍（はりゅうもん）文を想起させる文様をもつ貝符は，弥生時代前期から後期のものと見なされ，弥生文化の波及以前，中国江南地方と琉球列島に生じた密接な関係のもと，古代中国の軟玉（なんぎょく）製品を原型に，南海産の貝を素材として生まれたと推定された。

下層貝符の文様は殷・周の饕餮文が戦国時代の楚に入り変化したものに起源をもち，上層貝符の文様は楚の苓床（れいしょう）の透かし彫りと類似するとされ，第二次調査出土の「山の字貝符」が後漢末の隷書体に比定されたこともあり，貝符文様の系譜を中国の古代文化に求める中国起源説が定説化した。

沖縄諸島や奄美諸島で発見された貝符を視野に，1980年代以降，貝符の分類と編年的研究が進められる中で，一緒に出土した年代の指標となる土器との関連での年代観の修正を受けて，殷・周時代に盛行した饕餮文や戦国期の苓床との関係を時代的な隔たりから否定する見方が提起された。

また，「山の字貝符」の刻線は浮文を表すためのもので，文字ではないとの解釈も示され，下層貝符の出現や上層貝符の成立について，中国文化の直接的な波及に求める見解から脱し，その深淵に古代中国の文化的影響を想定しながらも，琉球列島内部における交流と変化に目を向ける研究視点が築かれていった。

平成15（2003）年には広田遺跡学術調査研究会により報告書が刊行され，貝符の総括的な分類と変遷が提示された。同書では，広田遺跡における貝製装身具の組合せ（装身型）の検討から，広田人の素材貝の入手地が段階的に南下し，下層古段階に相互の接触から異形タイプ（南島様式）の貝符が生まれとする見解や，下層期古段階を弥生時代後期後半から古墳時代前期，下層期新段階を古墳時代中期，上層期を古墳時代後期（７世紀を含む。）とする年代観が提示された。

報告書の刊行後，奄美諸島の在地土器である兼久（かねく）式土器と上層貝符の文様の比較研究や，琉球列島の貝符を含む彫画貝製品の製作技術に着目した研究，広田遺跡の埋葬単位の前後関係の分析に基づく新たな分類や変遷の提示など，琉球列島に視点を置く，新たな研究が進められている。

琉球列島の地域ごとの土器の編年研究の進展を受けた下層貝符の出現を弥生時代終末から古墳時代中期，上層貝符の年代を６世紀後半から９世紀頃とする新たな年代観のもと，その起源と変遷，用途や葬墓制との関わりなど，貝符に秘められた謎の解明が期待される。

※　参考文献は省略した。詳しくは，『広田遺跡』（2003　広田遺跡学術調査研究会・鹿児島県歴史資料センター黎明館），「広田上層タイプ貝符に関する一考察」（山野ケン陽次郎　2010『南島考古』29号）を参照のこと

（主任学芸専門員　中原　一成）

研究ノート

島津豊久に関する棟札について

はじめに

島津豊久（天正16（1588）年から慶長５（1600）年。文禄・慶長の役や関ケ原の戦いで活躍した。佐土原城主２代目。初名は忠豊。以下，「豊久」と記す。）について，文献や資料から，寺社の棟札において，檀主名が記載され，年代的に豊久と思われる事例を挙げる（下記図表のＡ～Ｄ）。この中から，特に興味深い箇所について，私見を述べたい。

１　荒田・南方神社の棟札について

図表Ａの棟札には，一般的に記載されるべき奉名が見られない。また，Ｂ～Ｄには記載されている，地頭・代官，宮司の記載がない。さらに，天正16年８月に，父家久の跡を相続した豊久は，当時，佐土原（現・宮崎市）を本拠としていた。この棟札のみ，佐土原ではなく伊佐市に奉納されたのか，詳細は不明であるが，家久と関係者らの活動を考える上で興味深い。なお，工匠に見る井上・沼口は，元は日向の伊東氏に属する番匠とされている。

文禄五年棟札写真
（部分）
都萬神社所蔵
西都市教育委員会提供

２　「嶋津藤四郎」とは

図表Ｃの棟札で，地頭かと推測される「嶋津藤四郎久祐」とは誰か。該当する可能性のある人物は，以下の２人になる。

①　薩州家島津義虎四男・島津忠栄

「薩州氏系圖」や『本藩人物誌』には，忠栄の通称を，藤四郎として記載している。また，「御家伝并諸家由緒」は，忠栄が豊久の姉に嫁いだとの記述があり，豊久との姻戚関係が確認できる。

②　豊久の実弟・島津忠直

「佐土原藩譜巻之一」には，「忠直源七郎一作藤四郎或是乎，薩州永吉主」とある。

また，同「巻之三」には，「鹿弟島津藤四郎一ニ源七郎忠直ニ作ル」とある。

なお，「西藩野史」には，庄内の乱（慶長４（1599）年）に，島津藤四郎と島津源七郎（忠直）が同時に兵として加わっていた記述があるため，藤四郎は，忠栄の可能性が高いと考える。しかし，「久祐」の諱は，ここまで参照した系図や記録において，忠栄にも忠直にも記載されていない。

３　豊久不在

図表のＤ，慶長５年６月，豊久は上方にいて，佐土原には不在である。本人が直接，奉納したものではないとすれば，地頭の徳田大助（豊盛）が奉納したとも思われる。豊久は，当時「薩摩侍従」とも呼ばれているが，文書等で従五位下を記しているものは，確認していない。なお，徳田大助については，後に垂水島津家家臣となったとの系図がある（「垂水諸家略系譜」）。

まとめ

豊久の系統は，後に，永吉（現・日置市）の私領主となり，永吉島津家と呼ばれる。しかし，佐土原時代の豊久について，その活動や，家臣団の構成など，不明な点は未だ多い。

今回のように，棟札などから読み取れる情報で，新たな情報を積み重ね，少しでも実像に近づくことができればと考える。

【参考文献】
『宮崎県文化財調査報告書第７輯』（宮崎県教育委員会，1962年）
『本藩人物誌』（鹿児島県立図書館，1971年）
「新編島津氏世録支流系圖」『鹿児島県史料　旧雑記録拾遺諸氏系譜三』（鹿児島県（黎明館），1992年）
『天井裏の文化史』（佐藤正彦，講談社，1995年）
『佐土原藩譜一』（宮崎県図書館，1997年）
『ひさみね第16号』（広瀬地区郷土史同好会，1999年）
『垂水市史料集（十四）』（垂水市教育委員会，2000年）
『鹿児島士人名抄録』（上野堯史，高城書房，2005年）
『菱刈町郷土誌　改訂版』（菱刈町，2007年）
「御家伝并諸家由緒」（『鹿児島県史料　旧記雑録拾遺記録所史料二』鹿児島県（黎明館），2012年）
『伊佐市郷土史誌史料集一』（伊佐市教育委員会，2015年）

（資料調査編集員　宮下　愛）

図表　島津豊久と思われる檀主名が記載された棟札一覧

	A	B	C	D
神社名（所在地）	荒田・南方神社（鹿児島県伊佐市）	巨田神社（宮崎県佐土原町）	都萬神社（宮崎県西都市）	天萬天神社（宮崎県佐土原町）
年　号	天正十九(1591)暦辛卯文月廿一日	文禄五(1596)年歳次丙申霜月十六日	文禄五(1596)年歳次丙申九月□□日	慶長五(1600)年庚子林鐘（６月）廿八日
奉　名	ナシ	奉再興田嶋庄巨田八幡宮	奉再興妻万宮	上棟奉再天満大自在天神
檀　主	大施主藤原朝臣忠豊	大檀那藤原忠豊朝臣	大壇那藤原忠豊朝臣	大檀那従五位下忠豊
地頭・代官	ナシ	當地頭藤原頼直 當代官徳田大助	當(地頭カ)嶋津藤四郎久祐朝臣 當代官徳田大助　在原義尚	當地頭職徳田大助
工　匠	大工井上土佐守 小工重吉民部左衛門尉	大工井上土佐守 大工小野良直	宮鍛冶(沼口カ)□走典	大工井上左衛門良直
僧・宮司	導師法印實海	當代官司　大坊　同平宗仁	當代宮司伊勢□□□親	遷宮権大僧都勢定 再興代宮司職□木新六
偈	「一切日皆善」及び梵字	「聖主天中天」 五言四句　四行	「聖主天中天」 五言四句　四行	「聖主天中天」 五言四句　二行
外　郭	尖頭形　上幅大カ　左下隅切 釘穴ナシ	尖頭形　上幅大　左下隅切 釘穴一個	尖頭形　上幅大　左下隅切 釘穴ナシ	尖頭形　上幅大　左下隅切
法　量	総高82.3cm　横16.2cm	総高152.5cm　上幅16.0cm	不明	総高70.5cm　上幅13.5cm

調査研究報告

“もう一つ”の「本藩人物誌」

「本藩人物誌」について

「本藩人物誌」は，『鹿児島県史料集 第13集「本藩人物誌」』（鹿児島県立図書館，昭和48（1973）年）の「例言」によれば，「戦国時代を中心に，十五世紀半より十七世紀半までの約二世紀にわたって活躍した島津氏の一門，および家中の諸士のいろは順による略伝集」であり，人物調査・研究等で，比較的に利用度の高い史料と言えよう。

一般的に，活字本を除くその写本類の所蔵先は，鹿児島大学附属図書館（「玉里文庫」）と鹿児島県立図書館，東京大学史料編纂所の３箇所が知られているが，本館にも重要な情報を含むものが収蔵されており，平成14（2002）年に開催された本館企画展「古文書の世界 ―鹿児島の古文書に親しもう―」において展示された。

「本藩人物誌」の作者は誰か

「本藩人物誌」は重要な史料でありながら，その作者については，従来「福崎某」とのみ知られており，詳細は長い間不明であった。

ところが，前述の企画展の準備作業中に，本館所蔵の「本藩人物誌」に付帯する書状の中から，重要な手がかりが得られた。それは，「貴家御祖先福崎正澄君夙（つと）ニ史伝ノ造詣深ク彼ノ有名ナル本藩人物誌ハ其執筆編輯ニ成リ」（中略）（島津久光の自筆写本の）「写本全篇十冊貴家へ贈呈被致御祖先ノ労ニ酬（むく）ハレ候」というもので，昭和２（1927）年に「公爵島津忠承（ただつぐ）家扶（かふ）土岐弘」から，作者の子孫である福崎正治に寄贈されたものである。これにより，その作者が「福崎正澄」であることが確認された。このことは後に，本館栗林文夫主任学芸専門員が，「旧記題苑」（伊地知季安著）中の記述において確認している（「調査研究ノート『清色亀鑑（きよしきかん）』の編纂事情」（本館広報紙「黎明館だより」2011年2月1日発行）。

なお，福崎正治は若くして西南戦争に従軍し，その回顧録（本館蔵）を遺している人物でもある。

作者がなぜ“不明”であったのか

前述した「旧記題苑」は，複数の写本が知られているが，「本藩人物誌」の書名及び作者名を記載しているのは，管見では島津久光の家に伝来した「玉里文庫本」（本館蔵）のみである。

一方，玉里島津家資料中の「御蔵書目録」（本館蔵）中にも，「本藩人物誌　福崎正澄著」との記述がある。先に紹介した書状にある「島津忠承」氏は玉里島津家の前御当主であり，以上のことから，一つの可能性として，その作者の情報は，玉里島津家（又は久光）など限定された人々の間で，伝えられたのではないだろうか。

そしてそれは，作者正澄の師が，久光の侍読の上原尚賢であったこと（『郷土資料　第二輯（草牟田校区史）』（鹿児島市，昭和10（1935）年）等参照）と，無関係ではないのかもしれない。

“もう一つ”の「本藩人物誌」

東京大学史料編纂所が所蔵する「本藩人物誌」の中に，「巻之二　全」（内題は「本藩中世人物備考」）との史料がある。これは，前述の企画展の準備の中で，「上原尚賢南游録」等とともに，その存在と主な内容等が確認されたものである。

この「巻之二　全」と『鹿児島県史料集』の「本藩人物誌」中の「巻之二」を比較した場合に，その違いの大きさが際だつ。ともに「ハ」及び「ニ」で始まる姓の部分であるが，目録で比較すると，後者は僅か６つの姓（「浜田」「畠山」「林」「橋口」「新納」「仁礼」）であるのに対し，前者は「長谷場」「春山」「花田」「蜂須賀」「春成」「二階堂」「二之宮」「入田」など，総数33の姓を数える。

前者はその巻頭に，「此書ハ蓋（ケダ）シ初稿草本ナリ」との筆者の記述がある。全体の分量のバランスから見れば，こちらが本来のものであったのではないかとも思われるが，経緯など詳細は不明である。

現在知られているものでは窺い知れない多くの情報が含まれており，今後の詳細な研究・活用等が期待される。

最後に，前述の企画展準備や，久光と上原尚賢及び福崎正澄の関係，東京大学史料編纂所蔵「上原尚賢南游録」のことなどについては，五味克夫当館専門委員（現・県史料編さん顧問）にお世話になり，御教示も受けた。このことに改めて深く感謝申し上げたい。

（調査史料室長　内倉　昭文）

黎明館の催し物（平成28年11月～平成29年1月）

■**特別展示**　３階薩摩刀展示室[常設展示入館料]
国宝　太刀:銘「国宗」
期間：12月21日(水)～１月９日(月)

■**黎明館企画展**　３階企画展示室[常設展示入館料]
「新寄贈資料おひろめ展　明治から昭和
―見えてきた暮らしと世相―」
期間：９月21日(水)～１月22日(日)
「分家のチカラ・弟たちの役割　―島津氏本家と支流諸家―」
期間：１月31日(火)～５月７日(日)

■**学芸講座**　３階講座室[無料・申込不要]
「明治から昭和初期の郷土の姿
―行幸記念写真帖を中心に―」(企画展解説講座)
講師：黎明館学芸専門員　吉井　秀一郎
日時：11月20日(日)　13：30～15：00
「鹿児島の仏像彫刻に学ぶ(仮)」
講師：黎明館学芸専門員　切原　勇人
日時：12月４日(日)　13：30～15：00
「島津斉宣とその時代(仮)」
講師：黎明館学芸専門員　﨑山　健文
日時：１月28日(土)　13：30～15：00

■**ふるさと歴史講座**　３階講座室[無料・申込不要]
「薩摩藩の教育について　―上級武士及び郷士の子弟の教育―(仮)」
講師：九州大学名誉教授　安藤　保　氏
日時：１月21日(土)・22日(日)　13：30～15：00
（２日間にわたる講座のため，両日続けての参加をお勧めします。なお，当日先着順受付となります。）

■**古文書講座**　３階講座室
参加費：1,400円
日　時：11月５日(土)～12月17日(土)
毎週土曜日(全７回)　13：30～15：30
※申込みは，終了いたしました。

■**ウィークリー・ミュージアムガイド**
[常設展示団体入館料・申込不要]
毎日曜日の11：00～12：00で，週ごとに「歴史コース」，「文化コース」を交互に行います。
(11月６日(日)は文化コース)

■**楽しい体験講座**　３階体験学習室
「和装本づくりに挑戦しよう」
[材料代(200円)・申込制：定員30名，先着順]
対象：小学４年生から一般
日時：11月６日(日)　13：00～16：00
講師：黎明館職員
「正月を楽しもう」
[材料代(100円)・申込制：定員30名，先着順]
対象：小学４年生から一般
日時：12月18日(日)　13：00～16：00
講師：鎮守　寛氏(喜入ドングリ村主宰)

黎明館　ある日　ある時

御楼門跡（ごろうもんあと）の周辺

御楼門は，明治６(1873)年の火災により，焼失しました。

門の内側は，突進して来る敵を防ぐために，直角に折り曲げた枡形の造りをしています。周囲の石垣は，溶結凝灰岩を使い，「切り込みはぎ」という手法で，石の隙間が少ない積み上げ方がなされています。

また，門の礎石には，四角い柱に巻いた鉄板の錆跡が残っており，当時の柱の大きさを窺い知ることができます。

■常設展示入館料
一　般：310円(230円)　　高大生：190円(120円)
小中生：120円(60円)
※　(　)内 20名以上の団体料金
※　県内の小・中学校，高等学校，特別支援学校の児童生徒と，その引率者は，教育課程等に基づく学習活動の場合は免除(事前申請が必要)
※　身体障害者手帳，療育手帳及び精神障害者保健福祉手帳の提示があった方と，その介護者１名は免除

休　館　日（平成28年11月～29年１月）

平成28年
11／7.14.21.25.28
12／5.12.19.26.31
平成29年
1／1.2.10.16.23.25.30

※　平成28年10月11日から同29年３月24日まで，国道10号線沿線の正門入り口は，鹿児島（鶴丸）城跡の石垣修復工事のため，通行禁止(案内板あり)

期　間	黎明館以外各種団体主催の催し物	観覧料	お問い合せ先(敬称略)
11／12(土)～11／27(日)	第71回南日本美術展	有料	南日本新聞社事業部　099(813) 5053
12／２(金)～12／４(日)	ＪＩＡ建築展	無料	(公社)日本建築家協会九州支部　鹿児島地域会　099(284) 0240
12／２(金)～12／４(日)	書美院鹿児島県連合会作品展	無料	書美院鹿児島県連合会　090(6896) 0435
12／９(金)～12／14(水)	第47回鹿児島県高等学校書道展 第36回鹿児島県高等学校書道担当教員展	無料	県高等学校文化連盟　099(251) 7387
12／20(火)～１／14(土)	大恐竜展～福井県立恐竜博物館の世界～	有料	鹿児島テレビ放送　099(285) 6826
12／23(金)～12／30(金)	平成28年度ＪＡ共済小・中学生　書道・交通安全ポスターコンクール展示会	無料	ＪＡ共済連鹿児島　099(258) 5563
１／17(火)～１／22(日)	第20回松陽芸術祭	無料	県立松陽高等学校　099(278) 3986
１／26(木)～１／29(日)	第69回鹿児島県書道展　小・中・高の部	無料	県書道会　099(225) 2121

※ 掲載内容は10月20日現在のものです。催し物の内容・日程等は，変更になる場合もございます。

黎明　Vol.34. No.3（通算133号）

発行年月日　平成28年11月１日
編集・発行　鹿児島県歴史資料センター黎明館
所　在　地　〒892-0853　鹿児島市城山町7番2号
Tel(099)222-5100(代表)　Fax(099)222-5143
ホームページアドレス　http://www.pref.kagoshima.jp/reimeikan/
メールアドレス　reimei@pref.kagoshima.lg.jp